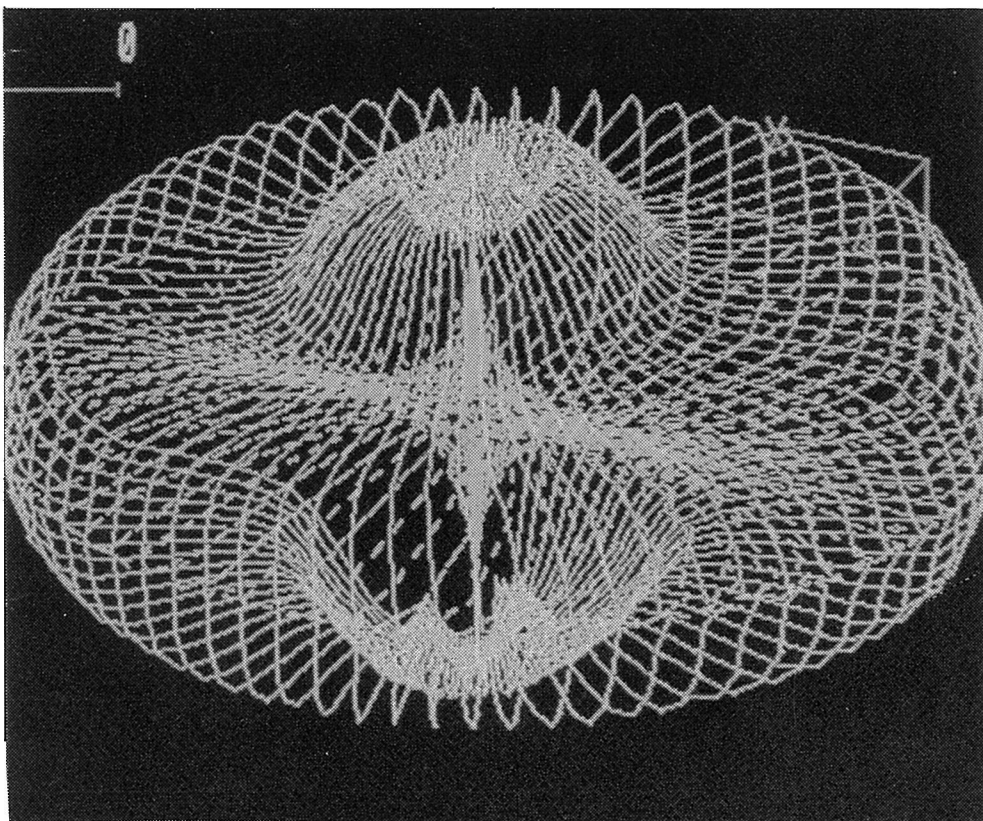


日本産業衛生学会東海地方会

# 地方会ニュース

発行所 日本産業衛生学会東海地方会  
〒470-11  
愛知県豊明市沓掛町田楽ヶ窪1-98  
藤田学園保健衛生大学医学部公衆衛生  
学教室内 電話(0562)93-2453  
発行責任者 島 正吾

(題字 皿井 進筆)



コンピュータ  
グラフィック  
三次元  
グラフィック

総てのものをコンピュータによって立体的に演算し展開する機能をもっていて設計段階で想定したものをブラウン管に画きだすことのできる画像処理システムである。

—三菱電機提供—

## 知 恵 と 知 識

吉 川 博



医学は、健康と病気に対するサイエンスとアートであると云われる。産業保健も例外ではない。産業保健学と学がつくとむしろサイエンスであり、産業保健と学がとれるとむしろアートであろう。

サイエンスは、一般的に冷たい理知的な感じを与え、アートは、暖かい心を感じさせるものである。どちらにしても人間の英知をしぼり出してで

き上げてゆくものである。サイエンスは過去の法則や知識に新しいものを構築してゆく作業であろう。アートは、サイエンスで得たものを人間集団の中で応用する技法ということができるであろう。英語辞典でアートをみると、その中に「芸術的技法」という言葉がでてくる。芸術的技法となると、人々の心をうつ、そして心をなごませる方法ということになるであろう。ちなみにサイエンスも引いてみると、「知識」という言葉がでてくる。知識というものは孫引き式にどんどん膨張してゆく性格のものである。

労働の態様は、産業革命以来、様々に変化してきた。一言で云うなら、動的労働から静的労働に変わってきた。とどまることなく変

ってきた。「一体、人間のことをどうしてくれるのか」と云いたい程の変わりようである。動的労働の時代には、工場自体が熟練を演じて人間形成の場であり、労働に生き甲斐があった。静的労働に変わってきて、工場が人間形成の場でなくなり、労働に生き甲斐を求めることがむづかしくなってきた。と同時に、心に対しても従来みられなかった影響を及ぼすようになった。

機械は、規格性、互換性、反復性、普遍性という特性をもち、人間はこれに対応して、個性、独自性、創造性、発展性という特性をもっている。現代文明はサイエンスによって生じた不都合はサイエンスで解決しようとする。知識の上に知識を導入してゆくの現代であろう。しかし、上述のように機械と人間は水と油のような相入れない面をもっている。機械と人間の間には、もっとアートの考え方を導入する必要があるだろう。簡単に云うなら、知識の活用とともに、もっともっと人間らしい知恵をしぼり出すことが必要ではないだろうか。(岐阜大学医学部公衆衛生学教室教授)

昭和60年度日本産業衛生学会東海地方会  
研修会

(昭 60. 6. 21 静岡たちばな会館)  
プログラム

- ・静岡県の産業の発展と労働衛生  
 神奈川県労働基準局労働衛生課長  
 小坂 稔  
 (前静岡局安全衛生課長)
- ・化学物質の毒性、発がん性 — 病理学の立場から  
 (財)食品農医薬品安全性評価センター  
 日本バイオアッセイ研究センター 榎本 真
- ・NMR-CT 技術とその現状について  
 旭化成システム機器エンジニアリング研究所  
 第一研究室長 豊島日出夫  
 (運営委員会代表) 清水 善 男



例年のこととはいえ、うっとうしい梅雨のさ中、何の演出もない研修会でしたが、大勢の会員のご協力をいただいて無事に終了できました。あらためて皆さん方にお礼を申し上げます。

小坂氏は太平洋ベルト地帯の一環として労働衛生問題にも事欠かない静岡の実態を概説され、病理学者のお話は、化学物質の環境汚染とその健康への慢性影響が問われている折柄、発がん試験や、その成績の評価など興味のつきない内容でした。第3席は、医療現場の最前線の話題の一つとして質問も多く時宜を得たものでした。

お陰さまで懇親会もたいへん盛会でしたが、ひとつ心残りは医師会への呼びかけを見送ったことでした。

＜静岡県における職業性疾病発生事例＞

小坂 稔

先般行われた東海地方研修会での説明の中で事例について若干のコメントを以下に補足させていただきます。

- 1 タンク内部の洗浄作業におけるトリクレン中毒  
 構内下請の行うトリクレンを用いてタンク内部の洗浄作業を行っている際に中毒になった。
- 2 綿工業における綿肺  
 遠州の繊維工業における綿粉じんによる綿肺の疑いが発見され話題となった事例である。
- 3 カツオブシ製造工程にCS<sub>2</sub>中毒  
 カツオブシの製造工程でCS<sub>2</sub>を用いてカツオを殺菌する工程で中毒になった。
- 4 田子浦のヘドロ公害  
 田子浦港のヘドロしゅんせつ工事中H<sub>2</sub>S中毒になった。
- 5 ブラジル産パウフェローによる皮膚障害  
 ブラジルから輸入した木材を加工していたところ皮膚障害を起こした。
- 6 遠州じん肺訴訟  
 銅を産出した久根鉱山に従事していた労働者が企業を相手に民事訴訟を起こした。
- 7 廃油処理業におけるH<sub>2</sub>S中毒、酸欠  
 廃油処理用タンク内で清掃作業中にH<sub>2</sub>S中毒、酸欠が発生した。

＜化学物質の毒性発がん性—病理学の立場から＞

榎本 真



近年、化学工業の発展に伴って、夥しい種類と数の新しい化学物質が登場している。それらは生活関連物質として、文化向上・健康の保持などに寄与する一方、中毒・環境汚染・副作用といった本来の目的から外れた影響を与えることがある。

これらの化学物質の中には、病理学的に新しい外因として、人や動物の様々な組織を標的とした各種の病変を起すものがあることが明らかとなっている。このように化学物質に対する生体の応答は多様であるが、病変のパターン化も可能であり、またその作用機転の解明から、因果関係を形態像から解析することもできる。実験動物を用いた病理学の分野では、人の疾患モデルの研究も重要であるが、最近では医薬などの開発の前臨床試験、あるいはそれらの原因も含め、広く化学物質の生産段階での毒性・発癌性の有無を検討する安全性試験の領域で、病理学的検査の役割が重要視されている。

その試験データを国際的に相互利用できることを前提として、OECDで検討されたGLP (Good Laboratory Practice) 規制案や、各種試験法のガイドラインに準じた施設・機器・人員組織を備え、試験の計画と実施、信頼性の保障・データや標本の保管などを“厳正”におこなうことが必要となっている。もちろん安全性の試験方法も、毒性・発癌性の研究の進展と平行して、改善されることが望ましいわけで、化学物質の生体影響に関する日常の地道な衛生管理面での知見が、このような分野にも反映することを自覚していただければ幸いである。

＜NMR-CT 技術とその現状＞

豊島 日出夫



最近、話題となっている新しい診断装置に、NMR-CT (核磁気共鳴コンピュータドトモグラフィ) がある。これは、核磁気共鳴現象を利用して、体内の水素原子核の分布を画像化する装置である。スキャンは電氣的に行なわれるので、患者を動か

かすことなく任意の断層像が得られ、放射線被曝もない。さらに、共鳴の起り方が、着目する水素原子核の物理的・化学的周囲環境により異なるので、含まれる情報が多くなり、組織間コントラストの高い画像が得られるという利点がある。将来は、NMR-CTが、X線CTを相補・或いは代替するであろうとすら言われている。

このように、優れた特色を持つNMR-CTではあるが、真の実用化のためには、現在医療機器メーカーがその克服に鎗を削っている次のような問題点がある。

- 1 磁場を使用するため、設置場所の選定整備に手間がかかる。
- 2 撮像所要時間が長く、1回当たり数分間を必要とする。
- 3 画像の情報量が多いので、診断に知識と経験を要する。
- 4 価格が、X線CTの1.5～4倍と高い点。

しかし、磁石の設計には十分改良の余地があり、同時多重スキャン技術の開発・臨床例の蓄積による診断法の確立・さらには、量産化によるコストダウンが軌道に乗りつつある。それに加えて、高い磁場を使用しての、P・Na・C・F等の画像化も研究室レベルでは達成されてきているので、NMR-CTが、一般診療の主力機器として、医療の表舞台に上るのは、そう遠くない将来であろう。

話 題

職業性黒皮症

症例：50才の女性、職業は合板製造会社社員。

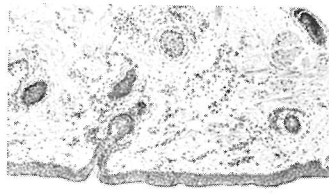
現病歴：昭和42年頃より木の粉とセメントを混ぜて樹脂で固めて板を作る仕事に従事していた。昭和47年頃より顔面に発赤と搔痒感を認め、近医にて接触皮膚炎の診断の下に外用剤を投与され塗布していたが、紅斑は前腕、首、項部にひろがり、次第にブロンズ色の色素沈着を生じて来た。この時点で黒皮性の診断を受け化粧品の使用禁止の指示により、化粧を中止したが症状は進行した。昭和51年4月名古屋大学医学部附属病院分院皮膚科初診（写真1）。



51.4 初診時

初診時検査：臨床検査では血液生化学、耳血一般、血液像、血沈値に異常を認めなく、尿中17KS、17OHCSの低下、皮脂中の過酸化脂質量の上昇を認めた。DNCB感作成立。皮膚生検では慢性刺激型黒皮症の組織所見を呈した。即ち軽度の角質肥厚、表皮肥厚を認め、表皮基底層の液状変性は著明ではないが、真皮上層から中層にかけて炎症細胞浸潤と色素失調を認めた。（写真2）

パッチテストでは、化粧品が原因の黒皮症で高い頻度に陽性反応が見られるタール色素赤色219号（R-219 1% pet）、及びR-219の不純物であるスダンI（Sudan I 0.1% pet）は、ともに陰性



組織所見

であった。セメント、木粉をワセリンに混ぜたものとフェノール（2% pet）では、本邦基準で+反応を示した。また硬化剤（1% pet）でも陽性反応を呈したが、硬化剤の内容は不明であった。セメント、木粉の如何なる成分が陽性反応の原因であったかについては、患者が精査を望まず追求出来なかった。

職場で接触する木粉、セメント、硬化剤の刺激と、化粧品等の日用品の刺激との相乗作用によって皮膚炎が繰り返され、その結果色素失調が起り黒皮症を発症したものと推定された。

患者の職場には風呂が設置してあったが、女性のため遠慮して入浴せず職場の木粉を被ったまま帰宅していた。

転職は経済的な理由により不可能であったため、洗顔の励行と終



約 1 年後

業後に必ず入浴して汚れを落として帰宅するよう指導したところ、1年後にはかなり色素沈着が軽減された。（写真3）。セメントによる皮膚炎は左官によく見られ、原因としてクロム感作が報告されている。木粉による一次刺激性、アレルギー性接触皮膚炎は製材業者や森林警備員によく見られ、その原因としてフェノール類、テルペン類、キノン類、芳香族炭化水素などが考えられている。

（名古屋大学医学部附属病院分院皮膚科） 早川 律子

給食調理員の「指曲がり症」について

昨年3月、岡山県下の学校給食調理員に、指先の関節が「く」の字形に曲がる奇病が多数見出され、関節リウマチや突き指などの外傷の既往が存在しないことから、職業病の可能性もたと新聞で報道された。同年6月には、林業作業者にもこの「指曲がり病」が少なからず見出されたと細川が報告した。小生も同年7月に手指に異常を訴えたT市学校給食調理員20名を対象として、簡易診察を実施した。その結果、多くは皮膚湿疹などで、関節リウマチや突き指と無関係な手指変形は、2例のみであった。この2例の指曲がりはいずれも（Heberden）結節を主体とする変形性関節症と判断された。



本年の日本産業衛生学会(北九州)では、中桐等から、学校給食調理員の全国調査及び、K市での健康診断結果の報告があり、手指変形の有訴率が事務員3.3%に対し、調理員13.5%とはるかに高く、健康診断でもこの傾向が裏づけられたこと、年齢が増すに従ってそ

の差が拡大される傾向があること、勤務年数や1人当たりの給食数の多い群に指変形の有訴率が有意に高いこと等が示された。本発表は、手指変形の臨床診断が未検討のため、会場から、臨床病像がHeberden 結節などの変形性関節症ではないのか、関節リウマチとの鑑別をすべきではないのか等の発言があった。

以上が、調理員の手指変形に関する主な経過であるが、労働と手指変形との関連については、すでに1940年にStecherが手指を頻用する女性にHeberden 結節を数多く見いだしたと記している。Kellgren 等（1958）は家事における手指負担が変形性関節症の発症要因として重要であると述べている。Hadler 等（1978）は梳毛糸紡績工場の労働者に、負担の大きな部位に対応した手指関節変形が見いだされたことを報告している。

なお、ここで問題となっている Heberden 結節とは、イギリスの内科医であった W. Heberden (1710-1801) に因んで命名されたDIP関節近傍の硬い小腫瘍のことで、PIP関節の場合は、Bouchard 結節と呼ばれている。成書では、発症機転に外傷性と非外傷性があり、前者は野球選手やボウラーに生じ、後者は45才すぎの女性に顕著で遺伝的関連も少なくないとされている。調理員の場合、外傷性、非外傷性の両要因を検討する必要がありそうである。現在、当教室では名古屋大学分院整形外科と協力して調理員の手指変形の臨床病像の確定および Heberden 結節と診断された患者の発症機転等についての調査を遂行中である。

（名古屋大学医学部衛生学） 小野 雄一郎

### 新生 N T T の企業内医師一年生として

電電公社からこの4月1日を期に民間会社N T Tに移行、急速な組織整備の最中であって、私達、旧公社時代から勤務してきた医療スタッフも、現場職員達の切実な期待を一層、生々しく感ずるようになりました。あらためて、すでに民間企業の産業医として、地道に問題を直視し処理されてきた諸先輩のご指導のありがたさを、痛感するこの頃

です。旧公社時代から数えて21回目になる、私達N T T企業内医師、保健担当スタッフからなる健康管理研究会が、この7月、当地で開かれました。合同討議では“これからの体力づくりへのアプローチ”と“職場における精神衛生対策について（専門医との連携プレイの現状と今後の展望）”がメインテーマになりました。そして新たにV D T労働研究班と健康づくり研究班が、全国ネットで動くような具合で、私も？十の手習いを始めねばなりません。願わくば、私達の仕事も一発行事で片づけることをくり返さず、息長く親の代から受けついで個人々のくらし方を振り返り、今のくらしを折々立ちどまってゆっくり点検して、自分なりに孫、子の代まで長続きのするような生活習慣に裏付けされた、“しなやかな、したたかな体力づくり”のために役立たせたい等と、虫のよいことを考えています。これからも皆様、折々お声をかけて、ご指導下さいませ。

(N T T名古屋中央健康管理所)

伊 藤 怜 子

### 和歌山での10年を過ごして

満10年、和歌山県立医科大学に在籍したことになるが、病身の親をかかえている家庭の事情のため、昨年10月、大学を退職し、郷里岐阜に戻ってきた。友人知己もない孤独な状態での和歌山赴任であったが、10年もたつと、その土地で多くの友人達にも恵まれ、フィールドも拡大してくるものである。和歌山県には、いくつかの大企業がある

が、本社が他にあたり、大学との歴史的事情もあって、全くといっていい程、立ち入ることもなく過ごし、私の産業保健活動は、もっぱら市町村での地域職業保健に終始したように感ずる。つまり、第1次産業従事者、縫製、漆器工場での作業者などの健康問題についてである。地域職業保健は、のめり込んでいくと、医学を超越した、きわめて社会経済的対応のせまられる分野である。市町村長が中心となる行政で、すゝめていただかなくてはならない。少なくとも10年間で、山林業での振動障害に関しての基本的な対応策は確立できて、これから実績を積み上げようとした矢先の退職だっただけに、和歌山県からは随分、お叱りを受けた。

10年間の空白の後、東海地方に戻ってきたが、社会の変動、進歩の激しい時節だけに、今様「浦島太郎」のような心境で、出合う旧友達が新鮮に感じる。新天地は、産業保健活動とは若干遠のく機関であり、しばらくは成人病対策や看護系・歯科系の技術者教育に情熱をささげようと考えている。しかし、産業医学からとり残されないように、積極的に学会には出席したいし、関係職員にもすゝめているところである。

(岐阜県立健康管理院)

岩 田 弘 敏

## 随 想

## 最 近 の 学 会 研 究 会 活 動

### 第 6 回 愛 知 県 医 師 会 産 業 医 部 会 総 会、特 別 講 演

総会は6月14日愛知県医師会館において開催され、先ず「事業計画」と「予算」の報告があった。

「事業計画」には産業医研修会の開催、産業医の報酬並びに身分保証に関すること、産業医名簿の製作更に産業医のニーズを探るアンケート調査の実施等が盛り込まれている。

特別講演は、58年に「職業性呼吸器疾患の診断と治療」と題して研修会のご講演を頂いたばかりであるが、会員の評判がよかったからという理由に加えて、昨年日本産業衛生学会東海地方会長に皿井前会長のあとを受けて選任された島教授に重ねてご講演を頂いた。題は「高齢化社会と産業保健—21世紀への途を拓く—」であった。内容について細かく触れる紙面はないが、先ず「老いとは何か」と総論、「老人の性行動」と1章を設けて、文献を挙げ、蘊蓄を傾けて極めて理論的に詳述し、会員の気をやわらげ、更に日本人の寿命—いつまで生きるか、次いで高齢者の労働環境に論及し、日本の老人が働き続ける理由を解説し、最後に老人の健康問題では精神の項を講演後の質疑応答で補足して、結論として21世紀はソフト・ウェアの世界、

「Small is beautiful」と纏めて終了。

島教授特有の迫力ある舌説に終始したが、折角の講演に対して、今少し質疑時間があればと、筆者なりに感じた。

松 本 光 雄

### 第25回産業健康管理研究全国会議（全産研）

本年度の「全産研」は関東産研が中心となって、去る6月29日、東京青山健保会館で約200名の参加者の下に開催されました。東海地方からも何名かの顔ぶれが参加していました。テーマは「職域における健康管理の質の向上をめざして」と題して、午前中に特別講演が2題、秋山房雄先生の一般的総論と、日循協の沢井広量先生の「これからの循環器管理のために」とが、まず述べられ、午後は恒例の、死因、結核、循環器、がんおよび難病のアンケート調査、全国約220事業所、118万人の調査結果が報告されたあと、午前中の各論として「循環器管理の質の向上をめざして」というパネルディスカッションが、6名のパネリストで活発に行われ、東海地区からは東海銀行平田幸夫先生が発表されました。来年も東京の予定です。

岩 井 淳

## 第4回国際手腕振動シンポジウム

1985年5月6日～8日に、ヘルシンキにて、第4回国際手腕振動シンポジウムが開催された。16カ国から115名の学者が参加し、日本からは22名で最も多かった。フィンランド(19名)、スウェーデン(19名)、イギリス(11名)、カナダ(8名)などから多くの参加があった。

学会第1日の開会式には、Rantanen 会長の挨拶で始められた。「フィンランドには振動曝露を受けている者が500万人いると推定され、その中木樵が25,000人おり振動障害対策により障害者は減少してきたが、今もなお、振動障害は重要な課題である。」という主旨であった。

1日には、I. 振動病の診断的側面 6題、II. 振動病の臨床的側面 6題、III. 振動病の疫学的側面 8題、第2日には、IV. 振動測定の問題 14題、ポスターセッション 26題、第3日には、V. 振動病の生理学的側面 9題、VI. 手腕振動について医学的、規制的、法律的事項 6題、VII. 振動病における手の感覚機能及び末梢神経 10題、VIII. パネルディスカッションでは1.振動病の診断における問題点、2.振動病の定義について、3.振動の測定と評価についてが討論された。

今回は岡田晃学会長のもとに金沢市において、1989年5月に開催されることが決った。

松本忠雄

## 県 だ よ り

### ◀ 愛知県 ▶

60年6月14日(金)、愛知県医師会産業医部会総会と特別講演が開催され、保健衛生大学教授、島正吾氏が「高齢化社会と産業保健—21世紀への途を拓く—」と題して特別講演された。講演内容については、本紙の別の所で紹介されている。

60年7月19日(金)、愛知県産業医懇談会総会が行われ、名大教授、竹内康浩氏に「有機溶剤中毒の最近の話題」と題して講演して頂いた。歴史的有機溶剤中毒の事例から、本紙話題欄でも紹介されたトリクロロエチレンやセロソルブ類による毒性などの最近の話題について言及された。又講演後のフリートーキングで、産業医の先生方より、健康管理上の貴重な経験や興味ある話題も提供された。

小森義隆

### ◀ 静岡県 ▶

○4月3日、第2回研修会準備委員会、講演内容並に講師、開催場所等について協議された。

○4月17日、災防部会一分科会、労基局から新任の高木安全衛生課長を迎えて昭和60年度事業計画の推進について協議された。

①粉じん、振動障害防止対策の推進。②労働衛生実態調査の実施。③講演会、実態調査結果発表会の開催。④労働衛生専門委員会の運営。⑤ブロック会議の運営。⑥県産業安全大会の開催。⑦その他。

○5月7日、第3回労働衛生専門委員会、県内の製造業における振動工具使用状況について行われた、実態調査の結果に基づき、具体的な事項について討議された。

○6月10日、第3回研修会準備委員会。研修会の内容、開催場所等が決定し、当日の会の運営方法につき協議された。

○6月21日、東海地方会総会並に研修会、静岡市たちばな会館に於いて別途報告された様に実施された。

牧角淳

### ◀ 岐阜県 ▶

当県産業衛生研究会は60年度行事の第1回としては、4月8日イビデングループ産業医、花井喜一郎先生の「心の健康(特に企業内に於て)」の講演と、研究内有志の事業所の血圧統計結果の配布があった。

5月31日、60年度総会と岐阜大学、吉川教授の「産業医学会の動向について」と労働基準局、木村安全衛生課長の「最近の労働基準行政、特に労働衛生行政について」の講演が行なわれた。

尚当県の研究会について、今後活動の活性化をはかるため会員のアンケートを求め、7月8日、役員会を開き、規約改正案の作成にあたり、本年度より改組して発足した県労働基準協会連合会、労働衛生センター(所長、森先生)に事務局をおき、県下各地区の労働基準協会を通して、会員の加入を強く呼びかけることにした。

井田龍三

### ◀ 三重県 ▶

本年度の三重産業医会総会は4月17日に開催された。総会后、三重大皮膚科、清水正之教授から接触性皮膚炎について特別講演をいただいた。産業現場はもとより一般生活でもみられる一次刺激性皮膚炎、感作性皮膚炎の症例が提示され、大変有意義であった。

本年度第1回産業医会研究会は5月31日におこなわれ、坂本教授からストレスについて講義を受けた。ストレス要因と耐性の強弱によるストレス反応の違いを明快に述べられた。

第1回産業看護部会が7月17日におこなわれ、野村新爾先生から検診結果の集計のしかたについて講義をうけた。受講者一同、学生時代にもどったように聞きいていた。

滝川寛

## 会 員 の 声

### 「Smoking」

公衆衛生の課題が特定の疾病予防よりポジティブヘルスと言われていた更に次元の高い方向に変わって来ているが、その影響は産業衛生の分野にも当然及んでいると思われます。従って最近特定の職場に於ける特定の物質による健康被害の問題よりも、普遍的な職場環境に於ける健康管理が関心を集めていると思われます。その中で成人病予防上にも重大な課題である喫煙問題は職場環境の汚染を防止する上で特定物質によるものより多大な影響があると思われます。産業衛生の分野でも行動テーマとして是非「職場環境に於ける禁煙」をとりあげていただきたいと思います。手はじめに会議に於ける禁煙を提案されては如何でしょうか。

(名古屋市衛生局)

笹野英子



### これからの諸行事予定

- 昭和60年度東海地方学会
  - 期日 昭和60年11月22日(金)
  - 場所 名大医学部鶴友会館 会長 竹内康浩(名大医衛生)
  - 特別講演 ①「接触性皮膚炎の原因物質の解明—最近の進歩—」
  - ②「職場の精神衛生—最近の話題—」
  - 講師 ①早川律子(名大医皮膚科) ②笠原嘉(名大医精神科)
- 第1回作業負担研究会
  - 期日 昭和60年9月24日(火) 13:00~
  - 場所 名大医鶴友会館 世話人 入谷辰男(トヨタ自動車)
  - 竹内康浩(名大衛生)
  - 内容 ①「中高年労働者の労働適応能力」
  - 山本宗平(産業医学総合研究所)
  - ②「最近の国際会議から」 小野雄一郎(名大医衛生)
- 第39回日本産業医協議会
  - 期日 昭和60年11月9日(土)
  - 場所 YMC A会館(大阪)
- 昭和60年度全国産業安全衛生大会
  - 期日 昭和60年11月6日(水)~8日(金)
  - 場所 大阪城ホールほか大阪市内会場
- 第11回アジア労働衛生会議
  - 期日 昭和60年11月10日(日)~15日(金)
  - 場所 マニラ市(フィリピン)
- 第25回腰痛研究会
  - 期日 昭和60年12月15日(日) 9:30~
  - 場所 名大医鶴友会館 連絡先 小野雄一郎(名大医衛生)
- 第17回精神衛生研究会
  - 期日 昭和61年1月11日(土)
  - 場所 中電ホール 連絡先 森川利彦(三菱電機名古屋)
- 作業環境測定講習会
  - 期日 昭和60年10月28日(月) 13:30~
  - 場所 産業貿易館 講師 竹内康浩(名大医衛生)
  - 内容 「有機溶剤に関する最近のトピックス」
- 第25回日本労働衛生工学会
  - 期日 昭和60年11月29日(金)~30日(土)
  - 場所 建設交流会館(大阪市西区売堀)

### 会員の消息

(59年3月8日~59年7月26日)

新入会員 14名

(愛知) 宇野鉄次(医療法人鉄友会)、安藤達志(協立病院)、立川賀代(愛知信用金庫健保)、由利卓也(保健衛生大学・医・公衛)、岡戸みどり(電々嶺名古屋中央健康管理所)、佐久間利定(東海産業医療団野呂診療所)、三木芳夫(ばんたね病院・内科)、細田浩(保健衛生大学・医・公衛)、杉山正義(名北労働基準協会)、吉野貞尚(旭労災病院)、鶴田博昭(保健衛生大学・医・衛生)、石垣恭子(保健衛生大・医・衛生)

(静岡) 後藤猛(日本楽器診療所)、石田保晴(浜松労災病院内科)

退会会員 1名(愛知) 堀江範子

転出会員 2名(愛知) 後藤富寿(神奈川へ)、清水正路(埼玉へ)

### 総会・理事会

- 総会
- 昭和60年6月21日(金) 静岡市たちばな会館
- ①昭和59年度事業報告 ②昭和59年度会計報告
- ③昭和60年度事業計画 ④昭和60年度予算案
- 第1回理事会
- 昭和60年5月14日(火) 大同特殊鋼本社 出席25名
- A. 報告事項 本部及び事務局からの連絡事項(島、立川)
- 地方会関連研究会等の報告事項(立川)
- 地方会ニュース(第3号)発刊について(岩井)
- B. 協議事項 昭和59年度事業報告・会計報告、昭和60年度事業計画・予算案について(立川)
- 昭和60年度東海地方会研修会について(清水)
- 昭和60年度東海地方学会について(竹内)
- 地方会ニュース(第4号)発刊について(岩井)
- 東海地方会史編集状況について(井上)
- 第2回理事会
- 昭和60年7月2日(火) 大同特殊鋼本社 出席27名
- 会長推薦理事の挨拶(宮宅)
- A. 報告事項 本部及び事務局からの連絡事項(島、立川)
- 地方会関連研究会等の報告事項(立川)
- 昭和60年度東海地方会研修会会計報告について(清水)
- B. 協議事項 昭和60年度東海地方会学会について(竹内)
- 地方会ニュース(第4号)発刊について(森川)
- 東海地方会史編集状況について(井上)

### 編集後記

○地方会ニュースの発行も2年目を迎え、4号をお届けできることになりました。このニュース発行もようやくスタート・ダッシュが終わったところで、今後のことを考えれば、へばってしまわないように、すべての点において安定した状態のペースを守っていく必要があるでしょう。

○さいわいにして、会員諸氏からは暖かいご協力を頂き、編集委員会よりお願いした原稿はとゞこおりなく寄稿頂き、それ以外にも積極的なご投稿を頂いています。しかし紙面の都合上や、産業衛生により関係深いものを優先させるとか、更にはニュース性を考えて、編集委員会の責任で原稿を短縮したり、次回にまわしたりすることもあります。その点をご了解をお願いします。

○前回の第3号の表紙の写真の説明が間違っていたとの申入れが、提供者の加藤氏よりありましたので、こゝで訂正させていただきます。正しくは「画工場絵付工程」とのことです。 **小森義隆**

次回発行 昭和61年1月1日予定

編集責任者 岩井 淳(三菱名古屋病院)

編集委員(五十音順)

柏木時彦(豊田健康管理クリニック)

加藤保夫(藤田学園保健衛生大学)

小森義隆(大同病院)

竹内康浩(名古屋大学)

久永直見(名古屋大学)

森川利彦(三菱電機名古屋)